

M
H
F
魔人

— 第3卷 —



モンハン人気は留まるところを知らず、
時にはネットカフェでカプコン公認の大会が開かれる時もある。

大会は『VSクエスト』と呼ばれるコンテンツを利用して行われるのが主である。
この『VSクエスト』のルールはごくごく単純で、
相手PTよりいかにして早く対象のモンスターを討伐するかという1点だけである。
しかしどのアイテムをどういったタイミングで使うかPTとしてどう連携をとるか突き詰めていけばかなり奥が深い。
私も以前『VSクエスト』に挑戦したことがあるが、
フレンドに一度も勝てなかった思い出だけが残っている。
きっと大会上位陣のPTから見たら私の緩慢な動きなど何もしていないのと同義なのだろう。

そんな大会(正式名称=VSクエストチャンピオントーナメント)が私の自宅の間近のネットカフェで開催されることに
決定したので、そこで廃人たちにインタビューをしようと思い観戦者枠で参加することを決意した。
そして大会当日。会場は私が予想した以上の盛り上がりであった。
お世辞にも広いとは言えないネットカフェに約100名もの人間が目を輝かせながら集まっておりMHFの力強さを改
めて感じさせられたのだ。
その中でうろろしている私に最初に声をかけてくれた男が松本秀樹(仮名)であった。
松本は場違いなスーツを着ており一見するとどこかの一流企業の営業マンのように見えた。
私がMHFの廃人の生態を調べていることを伝えると大会が始まるまでの短い時間で様々な廃エピソードを聞かせてく
れた。
やはりこの会場に来ているだけあって、松本も尋常じゃないほどの廃人であった。

「昔からゲームが好きだったんですよね。FFやドラクエはもちろん、三国志、ロックマン、バイオ、ときメモなんかも(笑)。

有名どころはとにかくなんでもやってみましたよ。

たぶんゲームが好きっていう土台があるからオンラインゲームにもはまってしまったんじゃないかな」

私にも心あたりがあるのでこう言った意見が聞けるとどこかほっとした。

松本が初めてモンスターハンターに出会ったのはMHP2Gであった。

ゲーム好きにありがちな、やり込み要素があればあるだけやってしまうというプレイスタイルだったので、MHP2Gのプレイ時間は何千時間もいっていた。

オンラインゲームをやり続けているときおりコンシューマゲームがぬるく感じられるのだが、

オンラインゲームを知らなかった当時の松本にとってはMHP2Gが今までのゲームに比べると遥かにやり込み要素のあるゲームに感じられたようだった。

MHFをやり始めた当初はMHP2Gと並行していた、しかしそのうちに両立が難しくなりいつのまにかMHFばかりをプレイするようになっていた。

今ではMHP2Gをはじめコンシューマゲームに手を出すことはほとんどなくなったという。

「今はネットもあるし、情報が早い。コンシューマはオンラインに比べるとあまりにもぬるい設定なのでその情報を見ただけでクリアした気分になってしまいやる気がなくなってしまうんです。

それと人とのつながりがほとんどないコンシューマゲームはどこまで進んだか自慢できる相手もないし、

結局辿りつく先(最強装備)は皆一緒になってしまうからね。」

松本はコンシューマゲームをばっさり切ってみせた。

完全にオンラインゲームに魅了されていたのだ。

MHFを始めて半年ほどたった時、松本は常人とはかけ離れた生活を送っていた。

当時の年齢は22歳。就職活動がうまくいなくて何十社と面接を受けたがすべて断られていた。

交通費や時間をどれだけ費やしても一向に決まらない就職先に、ストレスと不安で押しつぶされそうになっていた。そのことを忘れさせてくれる唯一の存在がMHFだった。

「ゲームはやればやっただけの成果が必ず出るから、先が見えない就活とは真逆で楽しくて楽しくてとまらなくなりましたよ。」

PCはもちろん一日中つけっぱなし、就職活動から帰ってくるとすぐにPCの前に座り狩り始めた。

就職活動との両立はしだいに崩れていき、大学にも行かなくなっていた。部屋から一步も出ずにMHFをやる日が続いた。

「実家だったから親が煩かったですよ。

でもね、なんだかんだ言っても3食食事は用意してくれるし本当にありがたかった。

もし一人暮らしだったらゲームをやりながら餓死してましたもん。

最終的には親も何も言わなくなって少し淋しくなりましたがそれも一時のことでさらにMHFにのめり込んでいきました。」

MHFの半分以上のモンスターには1種類につき3段階の強さのヴァージョンが用意されている。

①体力、攻撃力その他全てにおいて非常に弱く、主にMHF初心者が挑む『下位』。

②『下位』モンスターよりも大幅に強力になっている『上位』。

③弱点部位や弱点属性までも大幅に変更され、『上位』よりもさらに強力になっている『変種』。

以上の3つである。

そしてモンスターによっては『変種』がなく、そのかわりに『剛種』というヴァージョンが用意されているものもある。

この『剛種』のモンスターはどれもが理不尽なほどに強く、他のゲームで例えるならマリオ(1~2回攻撃を受けたら死ぬ)でワイリー(攻撃が多彩、何十回も攻撃をあてないといけない)を倒すようなものなのだ。

その上『剛種』に挑むには「剛種チケット」というチケットが必要で、このチケットを手に入れるのにもかなりの時間がかかる。

「のめり込んだひとつの理由に『剛種』がありました。『変種』までは適当にやっても倒せるけど『剛種』は皆で連携をしないと倒せない。皆で力を合わせてはじめて『剛種』のモンスターを倒せた時の快感は今でも忘れられません。それと僕が一番のめり込んでMHFをやっていた時は『剛種(当時は特殊古龍)』実装直後の時で、『剛種』に挑むのに「剛種チケット」がいらなかったんですよ。

今考えると夢の話でしょ？だから何十回何百回とやりましたよ。

それでしばらくして「剛種チケット」の実装が決定した時、すごくがっかりしましたが決定から実装までの期間が数週間あったので、その間エンドレスで『剛種』に挑み続けてました。寝る時は疲れて自然に目が閉じてしまった時だけ、ご飯を食べない日もたくさんあって、食べても一日一食おにぎり一個とか。それ以外はすべて『剛種』を狩り続けるみたいなw」

松本は笑って話してくれたが、常人には食を抜いてまで狩り続けるのは不可能だろう。

「最後は体調を崩して入院してしまいましたが、その時には剛種を1匹倒すと1枚もらえる討伐の証が3500枚越えてましたもの。そりゃ入院するよって話ですよ」

当時の剛種は2種類存在していてどちらのモンスターも狩りに出発して戻ってくるまでに、頑張ってもおよそ5分はかかっていた。

MHFは狩りにいくメンバーが頻繁に入れ替わるので、メンバー交代の時も+αとして含めるとさらに時間はかかる。単純計算5分×3500枚(匹)=17500分÷60=291時間+αである。

仮にまるまる2週間のうちに291時間狩りを行ったとすると一日に20時間狩ってる計算になる。入院は必然である。

その後松本はさすがに懲りたのかしばらくMHFをしなくなったようだが、やはり一度はまったものはなかなか抜け出せず、こうしてイベントに参加したりしながら適度にプレイしているという。

「もうMHFのやりすぎで入院は嫌ですからね。平日は2時間程度休日でも5時間程度とほどほどにしています。就職が運よく決まったのでやりたくてもできないってのもありますけどね。これからMHFをやろうとしている方は注意してください。僕がはまっていた時以上にやるのがたくさんあります。しかも全てがおもしろい。油断してるとすぐ廃人になって、場合によっては死にますよ」

なんとも嫌な名言を残して松本へのインタビューは幕を閉じた。